

業務内容の「見える化」

高度職業能力開発促進センター 小渡邦昭*

戦後、最高値圏で推移する歴史的な円高の状況下で、今まで以上に国内製造業の国際競争力が低下している。「国内生産にこだわってはいは生き残れない」との声が聞かれ、産業空洞化が加速するのではないかとされている。

さらに、別の視点からも国内製造業を危惧する声は多い。具体的な事象として、新興国による多くの特許申請や旺盛な技術研究の表れから、「日本が強いはずと認識されている技術分野は果たし

て本当に優位に立てているだろうか」と懸念されるようになってきた。また新興国からは、「技術開発が活発に行われれば、日本の優位とする品質管理・作業改善などは、管理技術であるため容易に構築できる」とまで囁かれ始めている。国内でも「優位性を誇った製造プロセスの管理技術が徐々にほころびを見せ始めた」という声も聞こえてくる。

これらの指摘は十分に吟味する必要がある。なぜなら、一見、納得できるが、「製造技術」と「管理技術」を独立・個別で考えることは、「モノづくり」を単なるシステム論として論議することとなり、発展性を必要とする製造業では実効性に疑問を持つことになりかねない。

つまり「製造技術」と「管理技術」は、図1のようにPDCAのサイクルにおいて相互補完の関係であり、これらはコントロールする「人材」が大きく関与する。さらに、現状を十分に把握できる作業者が「いい仕事」をするということは、
いい仕事＝方向性

×モチベーション（やる気）…管理技術
×能力（知識・経験）……………製造技術
とも考えられる。

モチベーション・能力にマイナスは想定できないが、方向性はマイナスがつくことも考えられる。したがって、モノづくりに関わる人々が同じ認識を持つことが重要であり、そのための具体的方策が必要とされる。これらによりモノづくりは、本当の意味で螺旋状に進化を遂げることが可能になると思われる。

*（こわたり くにあき）：素材・生産システム系教授
〒261-0014 千葉市美浜区若葉 3-1-2
TEL：043-296-2698 FAX：043-296-2589

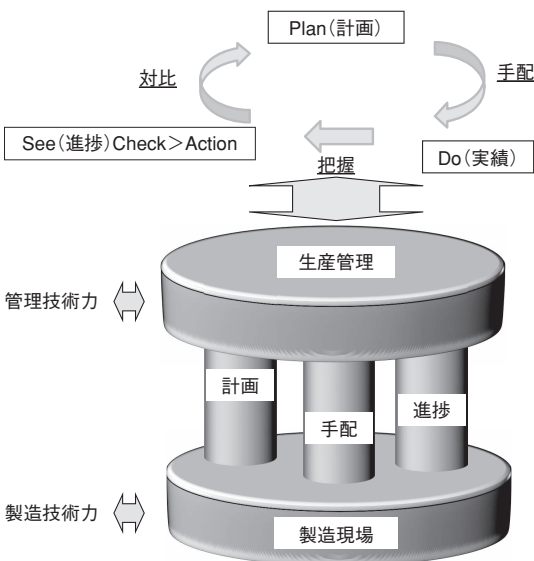


図1 製造技術と管理技術